

特集1

「ダヤド（二人組レッスン）について」



パートナー学習（ペース先生の論文より）

神保洋子

（ジャパンディヴィジョン・エリアコーディネーター）

ここに掲載したものはペース先生が書かれた論文です。

2015年研究会から出版した単行本の「未来に羽ばたくピアノ教育」の中には紙面の都合で入れることができなかった論文です。彼のダヤドが理屈をこねて出来上がった概念的なものでなく、実際に教えているうちに、子どもたちの要求から実現されてきたものであるということ、他のピアノ教室のグループ・レッスンとは全く違うものであることを確認してください。 神保洋子

パートナー学習

ロバート・ペース

過去の経験から

古い格言に“二つの頭は一つに勝る”ということは常に問題の解決を捗らせるために、あるいは少しの間の挫折また間違いを救ってくれます。しかしどれだけの音楽教師、ピアノ及び他の種類の音楽教師、が実際に日々の教えでこの言葉の大変多く含んだ意味に気がついていのでしょうか。私は先生と生徒という二つの頭ではなく、むしろ同じくらいの経験、背景、可能性がある二人の生徒のことを言っています。なぜそれがそんなに大事なことになるのでしょうか？私の初期の経験、生徒として、後に先生として二つの頭はたったひとつの頭で学んでいるよりも多くの働きをするのです。

私が子どもの頃に受けていたのは一般的に言う個人レッスン、あるいは個々に曲目を暗譜してテクニックを鍛えるたぐいのレッスンでした。私のレッスンではいつも時間が足りなくて、音楽の基本的なものを習う時間はありませんでした。それをやりたくても普通のレッスンの間ではその時間は全くとれませんでした。それから私は専門的に音楽を学びたいと思いましたが、それなら音楽の訓練はもっとやらねばならないと説得され、カレッジに行ってから、それら音楽理論、耳の訓練、書き取り、初見奏、キーボード・ハーモニー、その他が必須になるということを聞かされました。

後に私がジュリアード音楽院に入った時、まさしくそれはその通りでした。私はジョセフとレジーナ・レヴィーヌのピアノの授業と月曜夕方のピアノ・マスタークラスの必修に加え、音楽理論、耳の訓練、聴音、視唱、鍵盤和声のクラスをとりました。この月

曜のクラスでは、いろいろな生徒が新しく習ったレパートリーをお互いに弾きジョセフとレジーナが批評したり、それを弾いてくれたりしました。

私たちのプライベート・レッスンは表向き一人ずつでしたが、今思うとレッスンの時には次の生徒が来ていたり、私自身、他の誰かのレッスンに出席するように言われました。その理由の一つは、私たちは常に第二ピアノのいる協奏曲を勉強していたからです。また、近い将来同じ曲を習うという理由で他の生徒のやっている曲に付き合うこともありました。それは将来に備えてということでしたが、すでに過密過ぎるスケジュールにとっては不都合なことでした。しかし好き勝手はできないという理由で付き合うようにしていました。

ジュリアード音楽院を卒業し、私は幸運にもピアノとキーボードの科目を教えるように要請されました。私のピアノの授業は普通の個人レッスンでしたが、鍵盤和声は各々8名ほどのグループ・レッスンでした。私の習った通りの方式だったので、それは全く理にかなった教え方のように思われました。しかし私はピアノのレッスンで無駄な繰り返しをやっていることに気づくまでには、そう時間を要しませんでした。3時に教え、また同じことを全く何も知らない5時の生徒につき合わなければなりません。

その頃コロンビア大学教育学部の音楽教育の教授であるレイモンド・バローズ博士のクラス・ピアノについての研究のことを耳にしました。彼は文字どおり、ジュリアードの道を隔てた向かい側にいたので、それがどういうものなのか聞くため訪問することになりました。彼は自分のピアノ・クラスを見学するよう招待してくれました。

数ヶ月間のことをかいつまんでいうとピアノ・クラスの授業はある点では一人ずつ個々に教えるよりグループで教えるほうが良いことに気づきました。特にレパートリーの分析、初見や移調の技術の向上、人の前で弾く不安を軽減することなどは個人教授よりクラスで教える方がより効果的に扱えました。

まもなく私はコロンビア大学修士課程をとることになり、同時にニューヨークのスカースデールにスタジオを開きました。スタジオは色々な学校に近く熱心というのではなくても、ピアノのレッスンを始めたい若い生徒がたくさんいました。ジュリアードとコロンビア大学教育学部での訓練から、生徒はみんな音楽の基本一般についてしっかりした素養を持つべきだと私は確信していました。そこでピアノ・レッスンには、どの年齢層も週一回のピアノ・レッスンと週一回の理論のクラスを設けました。私は若い生徒たちが理論のクラスまたは音楽性一般教養のクラス (Musicianship class) を本当に楽しんでいることに気がつきました。それは大勢の学生が退屈で時間の無駄遣いで『平行5度なんて何に関係があるのですか?』などと感じたりしていた私の大学での経験とは全く対照的でした。子供たちはそのクラスだけのために熱心にスタジオに通って来るようにみえました。クラスではいつもある種の興奮と内容に対する強い好奇心に満たされていました。

生徒たちは、大体において個人レッスンでうまくいっていましたが、習っている曲が真から好きでない時とか、その週は練習するための時間が充分取れなかったとか、沢山の弁解をしなければならない時もあります。時として準備が充分できてないと思われる生徒は前の週からどのくらい良くなったか弾いてみせるよりもおしゃべりを好んでいる

場合もありました。対照的に音楽一般の理論のクラスではおしゃべりが少ないのは、発表するか口を閉ざして聞いているか、どちらかの状態が必要でした。しかし私はなおも毎週の個人レッスンに固執していました。演奏をうまくもっていく過程として曲を磨く唯一の方法に思われたからです。

私の指導におけるこの分野に新しい視点をもたらしたものは、音楽学習とは全く無関係なことでした。それはある午後、一人の母親がスタジオに来て、「娘が次の子のレッスンまで残り、次の子の母親と一緒に二人を家まで連れて帰ってもいいか」と尋ねたことより始まりました。私はまったく異存がなかったので最初の生徒のレッスンを始めました。それが終わって2番目の生徒のレッスンを始めたとき、最初の生徒は私たちが弾いている曲に興味を持った様子でした。待合室で待って宿題をする代わりに、立ち上がって何度もピアノの方に近づいて来ました。私が来るように誘うと彼女は喜んで残りの曲の間中ピアノのそばで見守っていました。私はその母親が2、3週間後に同じ依頼をして来るまで、このことを深く考えませんでした。最初の生徒(生徒A)は自分のレッスが終わると、明らかに次の生徒(生徒B)がすることを見たがっていることに気がつきました。それでも、この2回目のレッスンでは生徒間の交流はまだあまりありませんでした。私はまだこのレッスンではそれぞれの個人レッスンと考えていたからです。しかし、生徒たちは両方が注意深くつとめより一層助け合おうとするさまに私は感動を覚えました。次の週、私たちは行ったり来たりする手間を省くため、この二人の生徒が一緒に来て帰ることができないか話し合いました。生徒の親に話してみると、娘と一緒にレッスンをうけるためならなんとかしたいといっているということでした。私はこの状態を新しい視点から見てスタジオに二人組レッスンの全部の生徒に関わり合いのあることに気づきました。

利点

多分私が観察していて1番心をうたれた変化は、両生徒の態度がよくなったことでした。練習をしない言い訳も少なくなり、レッスン中に両生徒とも、より集中し、一生懸命にするようになりました。1人の注意が少しそれると、もう片方の生徒の活動と継続性が彼女をほとんどすぐに軌道に戻すのでした。

ちょうど同じ頃、グループで習う生徒は間違いも少なく、一般に個人的に習っている生徒より進歩が早いといったいくつかの学習調査が報告されました。残念なことに、特に音楽のグループ学習を扱った研究はその後あまりありません。

ダヤド(二人組んだレッスン)でレパートリー(ソロとデュエットの両方)を習う上での利点は、あきらかです。“組み合わせられた”二人は、各々相手が毎週いて楽しいし、集まるために特別の授業時間を別にスケジュールする必要の煩わしさがありません。徐々にわかってきたことですが、一方がある週、練習してこなくても、ほとんどの場合、もう一方が必ずよく準備してくるのです。それ故その週はすべてが無駄になるのではなく、“学習の勢い”が、私たちを前進させ続けました。確かに、言い訳が少なくなりました。そしてよく準備されたレッスンは例外ではなく、ルールになりました。このパートナー2人は、新しいダヤドでのレッスン形態が大変楽しかったので、自分たちの大グループのメンバーに“言いふらし始め”ました。この熱心な勧誘は、10人の子

どもが全クラスの生徒たちに、その年度の残りを、グループ・クラスの他に ダヤド（二人の生徒でやる）にさせるか、あるいは個人レッスンを続けながらグループ・レッスンを受けるのか、考えるように私を促しました。こうしてダヤドと大グループが合わさった形ができてきました。親の反応は、熱心な賛同者も少しはいましたが、たいいていはしぶしぶ承認する賛成ではありました。はっきりした反対はなかったので、やってみることにしました。

幸いに、6月15日ごろの最後の週のレッスンまでには、生徒たちがその秋もこのグループレッスンとダヤドのレッスンというかたちを続けたいと望むようになりました。さあ、スタジオの残りの生徒をどうするか、私はジレンマに陥りました。そしてついに、グループレッスンとダヤド、トライアド（3人組triad）のために、個人レッスンをやめることを決心しました。直ちに、以前はなかった諸問題が起きてきました。それらは、新規の生徒たちよりはむしろ、すでにレッスンをとっていた生徒、または両親から起こってきたのです。

問題点

新規の生徒と親は、先生としての私が1番よいと感じる学習様式をどれも快く受け入れました。反対に、前から個人レッスンをとっていた子どもたちの親数人は、ダヤドのレッスンの考えに、あまり乗り気ではありませんでした。実際、今までの個人レッスンの良いところと、その頃まだ「クラスピアノ」と呼ばれていたものの有効性を結び付けようとするとき、私の頭の中のどこかにも、不確かな点がありました。

その頃、「クラスピアノ」と呼ばれていたものは、ふつう、8名から20名の初心者または初級者が、週1、2度クラスとして集まるピアノの授業を指しました。

全員が共通のレパートリー、テクニック、初見、鍵盤和声などを習いました。より上級の生徒と、またはピアノ専攻者は、ふつう4人で2時間、または2人で1時間といった、より小さなクラスで授業を受けることもありました。その場合、各生徒は、ふつうレパートリーは別々なのですが、ある共通の課題を与えられることもありました。

私の懸念のひとつは、子どもたちの理論の学習をどのようにピアノのレパートリーへ結びつけるかということでした。（また、その逆も）レパートリーのときは、1度に1人か2人を扱う方がよりうまくいくように思われました。和声、耳の訓練、初見、即興の学習は、より大きなグループの方が効果的でした。どうすれば大きいグループと小さいグループの両方から、最良の結果を得られるのか。大きいグループをつくるのは大した問題がないように思えましたが、ダヤドのために、生徒を組み合わせようとしたときには、本当に頭が痛くなりました。最良と思われる2人は必ず、スポーツやスカウト活動、宗教教育などといった放課後のスケジュールなどのために、うまくいかなかったのです。

同じ時間に来ることのできる2生徒なら誰でも良いのではなく、良いダヤドを作ることの重要性を親に理解してもらうのは難しかったです。これには、放課後のスポーツの監督、スカウトのリーダー、教会の指導者、そしてもちろん、ピアノ教師といった数名の人々の歩み寄りを必要としました。ほとんどの人は、他の放課後の活動ではグループ作りに危険があることなど少ないため、ピアノレッスンでダヤドを組ませる上での危険

性について気がつかないようであった。

ダヤドの組み合わせで何年か苦労した後、私は秋になってからでなく、春の終わりにスケジュールをたててしまうことが絶対必要なことがわかってきました。そうすれば、それから他のことは、残っている時間内でスケジュール調整ができます。後になると、同じ地区のグループでやっているピアノ教師同士が、よりよいダヤドを得るために、生徒を交換するようになりました。競争相手としてよりも仲間としていっしょに協力することが、コミュニティーすべての人に大いに貢献したのです。

ある子どもが引越したり、相手を残してレッスンをやめるときは、本当に問題でした。後者のような状況は、数年間ピアノを学習した後、生徒が他の楽器を習いたくなったり、または充分な専門技術を得ようと「単独で」学ぼうと決心するときに起こりました。

そのような場合には教師は何ができるのか？奇数の生徒がいる場合、トライアド（3人組）を考えるべきです。1人にしないように。よい3者間の組み合わせによるダイナミックな良さは、もし2人の生徒が仲良く、3人目が仲間はずれだったりすると発揮し難いです。しかし、もし、教師が生徒にこのような問題点を気づかせ、それらを避けるように指導すれば、教師は、生徒3人ともにしっかりした相互学習をさせることができます。

時には、思うようにうまくいかない2人の生徒がいるかもしれません。すでにアレンジされた、他の活動を含むスケジュールのため、年度内に組み合わせの変更をするのは大変です。

1番良い方法は、親に、まずよく知らせておくこと、年度内に、グループの再編成が必要になるかも知れないこと、そしてこのようなことは、その子どもにとってプラスになる場合だけに試みられるということ、念を押しておくことです。一方、教師は、不適切な組み合わせに注意しなければならないものの、適正な注意と、企画と、上達する時間を与えられ、それでもうまくいかないダヤド、トライアドというのは非常にまれでした。

どのような場合にも教師は、生徒を、とくに転入してきた生徒を、「試しに」という気でダヤドに入れてはいけません。もし矯正すべき問題点があったとき、その問題を解決しようとする仲間の力に任せようとするよりも、個人レッスンになってしまいがちになるからです。

ダヤドで特別に考慮すべき点

ダヤドは、すべての演奏問題を解決するための万能薬ではありません。大きなグループが音楽の基本を教える上で問題に対して保証とはならないのと同様です。次ぎにあげる諸点は重要性の順ではなく、思いつくままに列挙してあります。

- 1) 先生は時として曲が演奏される前に考慮すべき重要なポイントを生徒に示していくのを忘れます。何に注目し、何を良く聴かなければならないかを強調するのには数分とかかりません。また生徒がお互いに教えあうのが待てないとき、先生の自身の言葉だけで指摘してしまうことがないようにしてください。

- 2) 生徒に能率よく教えるためには、曲の途中のどんな箇所からでも弾き始めたり、どんな箇所でも止めることができなくてはなりません。最初に戻ったり、譜面のその箇所を探すのに時間をかけないようにしましょう。
- 3) 教師はクエスチョンに直ちにアンサーをつけるように常にせきたててはいけません。そうすると生徒から良い的確な答えを考え出す機会を取り上げてしまうことがあります。
- 4) 厳しすぎる批評は否定的な効果を生み、またどっちつかずの中途半端な言い方は混乱をまねきます。教師は生徒が自分自身や友だちの批評をする際いかに前向きに、かつ的確にやれるか手助けをします。
- 5) どうしたら生徒たちがより短い時間により多くのことが学べるか常に考えてください。
- 6) 難しすぎたり、長すぎたりする曲を渡すことは生徒がその曲が弾けるようになって次の新しい曲に進むことをさまたげます。
- 7) 生徒Aが演奏している時、生徒Bが必ず聴衆として、批評家として積極的に参加するように留意すること。途中でぼんやりしたり、不注意にならないようにしてください。
- 8) 互いに補い合う前向きの姿勢を犠牲にして競争を煽るようなことがないように。パートナー双方とも互いの成功と成長が、全体のより良い学習環境を作っていることを考えなければなりません。相手のパートナーの成功に自分も常に満足する姿勢を忘れないように。
- 9) 生徒は演奏の中で問題点を指摘すると同時に良い点も見つけるようにしてあげてください。良い点を見つけることを育てて行くことは、問題点を最小限に留めていくようになります。
- 10) 生徒はかなりしばしば到達すべきところ、またはやればできるところまで行かずに、安住してしまう傾向のある人もいます。ダヤドの両者が各々の音楽的可能性を理解し合うように努めれば相手に対して健全な影響を与え、要求をすることができます。

- 11) 個人レッスンで生徒はしばしば特定の曲を「磨きあげよう」として、身動きがとれなくなります。彼らは、「求めている」高く洗練された作品に到達するのに必要な批評のプロセスを欠いてしまいます。一方、ダヤドで良き学習プロセスをたどると、生徒はよりよい方向に向かい、より作品を磨きあげることができるのです。

よく誤解しがちな点

1. ダヤド+大グループの構造は、初心者と中級者のものであり、真に才能のあるものは、徐々に個人レッスンに移行すべきである、というのは必ずしも正しくありません。ダヤドは、上級のどの段階においても、問題を解決する技術を磨くには、有効で効果的な方法です。生徒は、生涯にわたり、洞察力のある学習者となりうるのです。
2. 生徒は必要な「個人的な注意」を個人レッスンでしか受けられない、というのは間違いです。生徒は自分の特別な問題をいかに分析し、その上でどのように正しい行動をとればよいのかその方法を学ぶべきです。ダヤドでは2人が同じように問題に参加しているので、問題を素早くキャッチし、的確な処置をとるのにも、1人より2人の頭で考える方がよいという結果となります。
3. ピアノ教師は、ティーンエイジャーが個人的な悩みを訴える相手だというばかげた考えが根強くあります。不幸にして、レッスン中にこういう手段にでる生徒は、ふつう準備不足を隠そうとするためなのです。これらのタイプのおしゃべりはダヤドのレッスンではうまくいきません。なぜなら、他のメンバーがたいてい練習してきて、相手の言い訳にあまり興味を示さないからです。生徒が本当に教師に話しをしたいときには、どの場合でも、特別なアポイントをとり、出直して来るべきです。この手続きを踏むと、教師は大抵おしゃべりが減少し、練習が増すことに気がつきます。
4. 「クラスピアノ」への取り組みを延期する原因に、ある教師は、生徒全員がレッスンで同じ曲だけを弾くと思い込んでいることがあります。まったく反対に、生徒は共通の課題と同時に、いろいろ違う曲を与えられます。
5. 個人レッスンよりダヤドレッスンの方が演奏を磨くのが難しいという通念があります。私の経験では、生徒は仲間の前で演奏すると分かっているとき、その曲を高いレベルに仕上げようという気になります。もし生徒がよりよく曲をさらってきたら、教師はその曲を磨く段階にすぐ持っていくことができ、磨くことに時間をかけることができます。生徒が、作曲家の書いたものを充分かつ効果的に演奏できるようにし、音楽上での自己評価の批評能力を伸ばすことに重点をおくべきです。
6. 真に才能のある生徒は、個人レッスンでないと進歩が阻まれます。これも私の経験から正しくないことが証明されました。私には「すでに得た名誉に甘んじている」賢く才能のある生徒がいました。別の優れた生徒とダヤドにすると、両者とも演奏が良くなりました。これと同じようなテーマの研究が、ニューヨーク市ハーレム芸術学校のウィリアム・ロジャーズ博士により行われ、ダヤドとグループ学習についてより多くのデータを与えてくれました。彼のレポートは、グループレッスンを受

けている生徒たちは、個人レッスンだけを受けている生徒たちより、より多くを学び、より持続する、と指摘しています。

7. ある教師は2人の生徒がまったく同じ早さで学習するわけではないので、ダヤドを組ませることは不可能ではないが難しいと指摘してします。必ずしもそうとは限りません。仲間の成功を経験することにより、より早く学ぶよう励まされるレースのテクニックを使ってみましょう。もし1人があるとき後退し、もう1人が前進すると、前者はそのギャップを埋めようと急ぎ、それにより学習にダイナミックなはずみがつきます。このテクニックは、生徒がお互いに目標を果たすよう助け合うことにより、自分自身の演奏が実際に上達すると気づくとき、より心躍り、意欲をかきたてるものとなります。この前向きに補い合う姿勢が、否定的な競争に代わって、良いダヤド学習、ダヤド教育の神髄となるのです。

ダヤドを作ってはならない場合

個人レッスンの方が効果的な場合があるのでしょうか、ありえます。たとえば：

1. 特別の演奏の準備のため、幾度かコーチを受けるようなときには、ダヤドを試みるのは実際的ではありません。
2. 特別な問題のある子どもの教育においてセラピストが、「1対1」の学習を勧める場合があります。これは身体上、行動上の問題点、または今受けている治療の問題に関係していることがあるからです。
3. 相手が引っ越して、代わりを用意できない短い期間があるかもしれません。

他によいダヤド、3人組が組まれるまで、残された生徒は個人レッスンを進めてもかまいません。

4. ある教師は、わずかな生徒しかいなくて、いろいろな年齢、違った能力のため、グループ作りが不可能な場合があります。8歳の初心者と、15歳の上級者を組ませることはまったく意味がありません。しかしながら、これはさまざまな年齢と達成レベルを持つ生徒を組めないということを意味はしません。

ダヤドが最もうまくいく方法

1. グループとダヤドを関連させて教えたことのない教師には、最初初心者から始めるように勧めます。そうすれば教師も、生徒とともに成長できるのです。それから、新しい生徒たちのグループと、個人レッスンしか受けたことのない他の生徒たちを比べてみましょう。もし、あなたがグループやダヤドを教えてその結果が気に入り、この教授法を行おうと決めたのであれば、すべての生徒にこの方針をとりましょう。でなければ、以前からの問題のために、ダヤドになっても直ちに困難にであう生徒は、その問題に面と向かって解決するよりは、むしろ個人レッスンにもどりたいかもしれないからです。
2. 親のためにオリエンテーションの期間を設け、その家族全体を教育するのだという

ことを忘れないように。親しかダヤドを見たことがないでしょうが、もし正しくそれを紹介されれば、すぐにその重要性がわかるでしょう。

3. 6週間ごとの内輪のリサイタル、または「オープンクラス」は、親に情報を与え、あなたの計画を支援させるのに役立ちます。

ダヤド組替えにあたってすべきこと

1人の生徒が相手より進むように見えても、組替えを急いではなりません。これが通常のサイクルなのか、その生徒がもう1人よりつねに、本当に早く進んでしまうのか、確かめましょう。生徒が音楽学習のすべての面で優れていることはまれで、いくつかの分野で優るものの、もう1人の方が他の分野で優る場合がしばしばあることを忘れないようにしてください。注意深く考えた末、ダヤドの1人がプレッシャーをうけ、または遅れていると感じたら、新しい相手を探すべきです。もし組替える場合、考慮すべき点がいくつかあります。

1. 違うダヤドの組み合わせで、みんながペアとしてより強力な結びつきを得るのか、または、この再編成が、1組のダヤドをよりよいものにして他の生徒を犠牲にするのかです。
2. 生徒数人が動いて再編成が必要になる可能性を予想しているか。これは次の秋に入ってくる新入生、あるいは編入生にも関係するかもしれません。
3. あなたのダヤドは一般的にみてどれもうまくいっていますか。性格が非常に異なっているまでもぶつかりあいのある生徒がいたら、組替えをするのが順当です。
4. 放課後のスケジュールがたてこんでいると、良いダヤドを作るのが難しいことがあります。あなたがやってみたいと思うダヤドが実現するとういう利点があるということ、生徒と親の両方に知らせることです。
5. 我々の社会はせわしないので、最も良心的な先生ですら8-10人の初心者グループから、17歳になっても続いているダヤドを1組か2組育てられるに過ぎないかもしれません。この点から考えても、教師たちは仲間どうし知恵を出し合って、どうしたら一番効果的に学習できるグループで生徒を教えられるか検討してみるべきです。長期計画が教師と生徒双方にとっての利益になるのです。

結局のところ、ダヤドやトライアドによる教育といっても、教師と生徒の問題すべてをなくしてしまう魔法の処方箋ではありません。しかしそれは価値ある教育手段であって、それに参加する人間すべての学習プロセスを豊かなものにし、前進させるものなのです。とにかく、やってみてください。あなたとあなたの生徒たちがたくさんのものを得られますように。

(訳 神保洋子)